



音楽の魅力

成蹊学園 学園長
日本証券業協会 副会長

江川 雅子

7年ほど前にピアノのレッスンを再開した。ピアノは幼い頃から18歳まで習っていたが、長い間鍵盤を触っていなかったし、指も動かなくなっていた。「昔弾いていた曲を弾けるようになるといういな」ぐらいの思いで始めたので、フルタイムで仕事をしながらレッスンを続ける自信もなかった。だが、始めてみるととても楽しい。主に週末しか練習できないので、いつも練習不足で先生に迷惑をおかけしているが、月1回のレッスンを続けている。毎年、発表会にも参加して、昨年はリストの「エステ荘の噴水」を弾いた。

10代の頃は「指を速く動かす」「ミスをしなくて難曲を弾く」というのが目標だった。だが、ウィーン国立音楽大学で教育を受けられた今の先生は、「ミスタッチをしても良いから、綺麗な音を奏でなさい」とおっしゃる。天井の高いヨーロッパの建物の中では、音がどのように響くかを考えながら演奏するのだそうだ。

最近読んだ『音楽はなぜ心に響くのか』（山田真司他著）という本が興味深かった。同書によれば、音声には「音素」の系列の情報と、音素情報以外の高低・強弱・長短などの「プロソディ」と呼ばれる情報が含まれている。音素とは、口から発せられる音の音色をカテゴリー分けしてラベルを付けたもので、意味内容の情報を運んでいる。一方、プロソディは、感情の情報を運んでいる。「歌」は人間が感情を込めた叫びと音声混じり

合って発展し、形成された。歌のプロソディを、物を叩いたり、弦をはじいたりして真似たのが、楽器の始まりと考えられている。音楽は意味内容ではなく感情的な情報を伝達しているので、音声よりも感情に訴える。実際、実証実験によると、音楽が視覚情報よりも感情に訴えることが明らかになったそうだ。

確かに、若い頃に好きだった音楽を聴くと、その頃の状況や自分の気持ちがありありと思い起こされて、感情の渦に巻き込まれてしまうことがある。音楽が私たちの心を惹きつけたり、世界中の祭典・宗教・行事などで使われたりするのもそのせいだろう。

コロナ禍の中で、音楽会・コンサートは「不要不急」の活動に分類され、開催自粛、縮小、延期などが相次いだ。だが、それにより却って音楽が私たちにとって「なくてはならないもの」だということが明らかになった。音楽は私たちの生活に潤いを与え、気持ちを明るくしてくれる。これからもピアノを弾き続けていきたい。

